FIN FHI Research Institute — White Paper No.003（素案）

「何か違う」を、考えられる問いに変えられるか

前知をめぐる対話の価値と、その確かめ方

前田 英志｜FIN FHI Research Institute｜2026年9月・研究構想

会議が終わったあと、「決まった内容は正しいように見える。でも何か引っかかる」と感じたことはないでしょうか。まだ反対する理由は説明できません。別の案もありません。それでも、今の考え方のまま進めてよいのか、少しだけ立ち止まります。

FIN FHI Research InstituteのWorking Paper No.001は、このような感覚を「前知的違和感」と呼びました。未来が分かるという意味ではありません。経験したことと、いま与えられている問題の捉え方が噛み合わないときに生まれる、小さな停止の感覚です。違和感が正しいとは限りません。不安、疲れ、思い込みから生じることもあります。それでも、急いで消さずに確かめてみる価値はあります。

答えを出す前に、問いがずれていることがある

たとえば「営業担当者を増やすべきか」という議論が進んでいるとします。人数と売上の分析は正確でも、顧客が離れる理由が購入後の使いにくさなら、先に考える問いは違うかもしれません。「何か違う」は、営業担当を増やすべきでないという証拠ではありません。「私たちは何を問題だと思っているのか」を確かめるきっかけです。

BAOSの小さな対話機能「問いを見つける」は、そのきっかけを扱います。利用者が最初に書いた引っかかりを残し、AIと自由に話します。AIは質問を順番に並べません。相手の言葉を受け止め、時には「いま見えているずれはここかもしれません」と仮の言葉を返します。利用者は「近い」「少し違う」「まだ分からない」と直せます。最後には、本人が今見えていることを自分の言葉で残します。問いが見つからないまま終わっても、その状態を保存できます。

本当に役立ったと言える条件

AIが上手な文章を作っただけでは、学習の効果とは言えません。私たちが確かめたいのは、対話した人が自分で問題の見方を点検できるようになったかです。また、対話の質問が多すぎて面倒になれば、その体験にも改善が必要です。

確かめること	具体的な見方
問いが本人のものになったか	本人がその意味を説明し、違う部分を訂正できるか
別の場面でも使えるか	後日、初めて見る課題でAIなしに問いを作れるか
負担は大きすぎないか	質問の繰り返し、疲れ、途中終了を含めて見るか
無理に結論を作っていないか	違和感が残る場合も、そのまま表せるか

研究では、前知を扱う対話と一般的なAIによる相談を比べる予定です。利用前と利用後の言葉に加え、約1週間後の別の課題を調べます。よい事例だけを選んで発表するのではなく、問いが変わらなかった人や、途中で疲れた人も結果に含めます。このWhite Paperの時点では、効果を確認した数値はありません。

学校や仕事に広げる前に

もし効果が確かめられれば、正解を速く出す練習に加え、「何を考えるべきか」を本人が見つける学びへ応用できます。ただし、最初の研究だけで学校教育全体や仕事の成果への効果を保証することはできません。どんな人に役立ち、どんな場面では役立たず、どの程度の対話なら負担にならないかを順に明らかにします。

前知の研究が目指すのは、違和感を信じ込ませることではありません。まだはっきりしない感覚を、他人やAIの結論に預けず、自分で確かめられる問いへ育てられるか。その可能性を、体験談と測定の両方で検討します。

もとになった研究： 前田英志（2026）「正しい分析は なぜ正しい問いを保証しないのか」FIN FHI Research Institute Working Paper No.001。本稿に対応する詳細な研究計画はWorking Paper No.002（素案）を参照。